日本の色⑱　根岸色：暗い黄緑色。根岸は東京・台東区の地名。根岸土は、砂質の上質な上塗り用の壁土のこと。この土で上塗りした壁のような色を指す。

やまと日本のかたち

連載第十九回　建物に入り、伝統を知る

# 民家の知恵と潤い

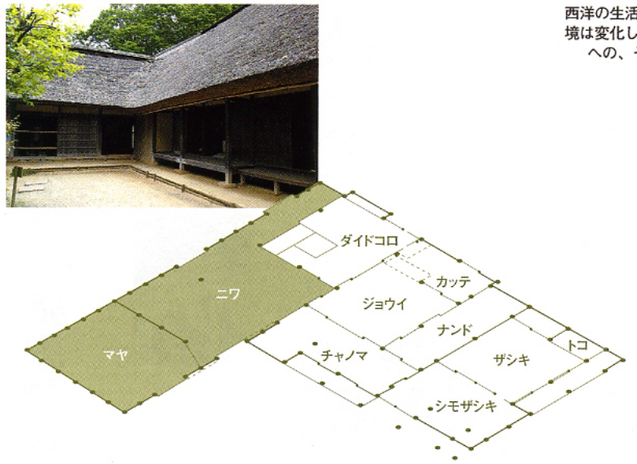
真の国際化とは自分の国を知ること。伝統的造形の日本民家を訪ね、生活に根ざした工夫を学び、その知恵と美学に酔いしれる。

## 紙・木・草で造られ、自然と共存する家

川崎市立日本民家園にある「江向家住宅」。富山県五箇山の合掌造りの住宅。茅葺き屋根の側面が段々になっているのがこの地方の特徴として見られる。

### 日本家屋の間取り

**西洋の生活様式が取り入れられ、そして利便性を求めて住環境は変化してきた。しかし、かつての日本家屋にこそ、家族への、そして自然への豊かな思いが込められているのだ。**




川崎市立日本民家園にある工藤家の間取り。マヤ（馬屋）を突出させたL字型の民家。旧南部藩領（岩手県北半部）に多く「南部の曲がり屋」として有名である。この家は1751～63年頃の建築で、現存最古の曲がり屋と言える。主屋には天井がなく、天井裏が一望できる。この地方の古民家には天井のない造りの家が多く、恐らく寒さの厳しい冬には囲炉裏の火で家全体を暖めていたのではないかと思われる。ダイドコロとジョウイは日常生活の場で、ナンドは寝室、ザシキは唯一の畳敷きで床を持つ特別室である。またダイドコロの囲炉裏は、土足のまま土間からも利用できる便利な造りになっている。

### 各地の家屋の特徴

Akihiko Toyama

外山明彦氏
1957年東京都生まれ。千葉大学工学部建築学科卒業。文化財建造物保存技術協会を経て、現在川崎市立日本民家園勤務。建築職。

取材協力
「川崎市立日本民家園」
住所：神奈川県川崎市多摩区枡形7-1-1
電話：044-922-2181

**岩手県**：雪の季節に馬の飼育がしやすいように、馬屋と主屋をつなげてL字型にした家（曲がり屋）が多く見られる。

**神奈川県**：屋根の頂上を土の重みで押さえた寄棟造りの茅葺きで、その土が散乱しないように芝や一八（イチハツ）を植えている。

**和歌山県**：全国でも雨が多く雨足の強い地区では、板壁造りにし、幕板（雨よけ板）で軒下などを囲っている造りの家が見られる。

**鳥取県**：中国山地の山村部では、豪雪に耐えるため、柱も梁も太いものが使用されている。屋根は入母屋の厚葺き茅。

**千葉県**：居住空間である広間や座敷とは別に、台所や作業用の土間を別棟として建てた分棟形式の家が広く分布していた。

**富山県**：五箇山に代表されるように、合掌造りの家屋が多い。養蚕が盛んになり、作業用の広い場所を確保するために発展した造り。

作田家住宅（千葉県）。漁師の家のため作業用の広い土間がある。

清宮家住宅（神奈川県）。17世紀後期の家屋。屋根には一八が植えられている。

text by 渡辺幸裕（案内人）+ photographs by 稲垣純也

### 古民家を訪ね、日本を知る

畳に着物で暮らしていた時代はほんの少し前のこと。薪と炭から電気やガスに、そしてネット家電や携帯端末など、生活は利便性を求めて進歩してきた。我々の住環境は決して元の時代に戻りはしないが、根底には確かに"住環境の不易流行"がある。それを今回川崎市立日本民家園で学んできた。

お話を伺ったのは日本民家園・建築担当の外山明彦氏。民家だけでなく寺社建築の歴史にも詳しい外山さんに、単なるノスタルジーではなく、民家を見る時にそこから学ぶべきポイントを伺った。

建築の歴史や用語、民家の造りに関しては参考サイトなどでも調べられるが、民家園のような場所に行き、実際に民家に入って間取りや構造を見ると、当時の生活ぶりが見えてくる。そして身近にある材料をうまく使って、家を造った大工の創意工夫がよく分かる。その地域の気象条件に合わせた設計などを見ると日本人の知恵は素晴らしいと感じ入る。

# 日本人ならではの発想が豊かに感じられる

## 空間を造る物

**雨どい**：雨水を流すために設けられたとい。分棟造りの家では両棟の合わさる部分（屋内）に雨どいを渡す。

雨どい

**囲炉裏**：室内の床を四角に切って掘り下げたところで火を燃やす。暖を取ったり、煮炊きをしたりした。

**縁側**：部屋の外周部につける細長い板敷き。廊下や出入り口として使う。戸外と仕切るものと、それをしない濡れ縁とがある。

**火天**：ひあま。囲炉裏の上に設けられた火棚。物を乾かしたり、燻製を作る時に使用する。

火天

**格子**：細い木材や竹などを、縦横に隙間を空けて組んだ建具。窓や戸口の外に打ちつけたりした。

**梁**：家の上部の重みを支えるために、棟と直角にかけられる水平材。湾曲した木材をあえて使うことも。

**三和土**：たたき。土間の部分。石灰・赤土・砂利などににがりを混ぜ、水で練って叩き固めたもの。3種類の材料を混ぜることから三和土と書いた。

梁

## 民家野外博物館

**北海道開拓の村**：北海道札幌市厚別区厚別町小野幌50-1
011-898-2692

**江戸東京たてもの園**：東京都小金井市桜町3-7-1
042-388-3300

**宮地嶽神社民家村自然広苑**：福岡県福津市宮司
0940-52-0016

**遠野ふるさと村**：岩手県遠野市附馬牛町上附馬牛5-89-1
0198-64-2300

**合掌造り民家園**：岐阜県大野郡白川村荻町2499
05769-6-1231

**琉球村**：沖縄県国頭郡恩納村山田1130
098-965-1234

**千葉県立房総のむら**：千葉県印旛郡栄町龍角寺1028
0476-95-3333

**奈良県立民俗博物館**：奈良県大和郡山市矢田町545
0743-53-3171

## 今なお継承されるもの

耐久性のある石の家に住んでいた西洋と比べると、日本ではかなり頻繁に建て直していると言える。経済成長や山間部の過疎化によって古い民家は急速に消滅し、今や我々はほとんどの時間を鉄筋コンクリートの建物で過ごす。日本の気候に合わせて作られた民家を訪ね、我々のルーツを感じるのも意義深い。居住空間がどんなに欧米化しても、日本人なら必ず玄関で靴を脱ぐように、今なお継承されている様式があることが分かるし、参考になることが多い。

古代建物自体がシンプルだった頃は一間だけの生活が基本であり、囲炉裏の周りではそれぞれの立場によって、座る場所が決められていた。入り口から一番奥が主人の座る横座（上座）、その両脇は女性が座るカカ座と客や息子たちが座る竪座。そして一番入り口に近い場所に使用人が座った。これが、ビジネスの接待などで使われる上座と下座の始まりである。

そして屋内への入り口は玄妙の道への関門、仏門に入ることを意味する玄関と呼ぶようになった。何気なく使っている家の用語にも深い意味がある。その意味を調べると、日本の伝統としきたりが浮かび上がってくる。玄関を入ればそこに、より深く日本を学べる世界が広がっているのだ。

### さらに深める参考情報…

**【書籍】**

『さがしてみよう日本のかたち 民家』
（日弁貞夫写真／立松和平・桑子敏雄文、山と渓谷社）

『民家のこころ』
（道塚元嘉著、鹿島出版会）

『民家の事典』
（川島宙次監修／島田アツヒト文・絵、小峰書店）

**【ウェブサイト】**

川崎市立日本民家園
http://www.city.kawasaki.jp/88/88minka/home/minka.htm

日本民俗建築学会
http://www.folkhouse.org/

民俗建築資料委員会
http://da.gwc.gakushuin.ac.jp/csrea/

会員制有料サイト ジャパン・ナレッジ
http://www.japanknowledge.com/

### ――日本家屋を訪れる装い――

春から夏へと変わる時期に着物も衣替えをし、裏地をつけない単衣に。サーモンピンクがさわやかな印象の訪問着。
（市川香苗さん＝読者、SP広告代理店勤務）

張り感のある塩沢紬の着物。季節の変わり目に着やすく、さっぱりとした印象を与える。
（渡辺幸裕）

着物撮影協力／銀座もとじ

**案内人・文** 渡辺幸裕（わたなべ・ゆきひろ）
ビジネス・コーディネーター。1950年生まれ。前職のサントリー宣伝部で、海外イベントを担当した時、自国文化についての知識のなさを痛感。2001年独立を機にビジネスパーソン向けに日本文化超初心者の会"和・倶楽部"を提唱、運営中。会のコンセプトは「日本人に生まれたことを喜びたい」。

［告知］

**日本かぶれの会**
**民家を訪ね歩く会**

川崎市立日本民家園を訪ね、各地から移築し保存している、様々な伝統的日本民家を見て歩きます。会の冒頭では、外山明彦さんに民家を見る際のポイントについてお話をして頂きます。ぜひご参加ください。

**日時**：7月23日（土）13:00〜15:30
**会場**：川崎市立日本民家園
**募集人数**：20人
**参加実費**：1000円
**締め切り**：6月28日（火）
**応募方法**：http://nba.nikkeibp.co.jp/yamato18/で必要事項をご入力ください。
**発表**：抽選のうえ、当選者に直接ご連絡します。

ご応募いただいた方に、本誌の取材協力者として取材や写真撮影をお願いすることがございます。ただし、これら以外の目的で応募者の個人情報を使用することはございません。